

働くことの大切さ

◎苦難は神様の贈り物

現代を生きる若者たちに、「働く」ことの大切さを教えなければならぬと思います。私は若いときに多くの挫折を味わい、たくさんの苦難を経験しました。しかし、そんな苦難に挫けず、前向きに必死に働いてきたことで、今日の自分があることに気づき、一所懸命に働くことの大切さを痛感しているからです。

大学卒業後、私は松風工業というつぶれ

かけた会社に、ようやく入社することができました。そんな私を見て、周囲は「稲盛君はかわいそうだ。大学でよく勉強し、成績もよかつたはずなのに、オンボロ会社にしか入れなかった。彼の人生はどうなっていくのだろう」と言っていました。

しかし、いま思えば、それは神様がくれた最高の「贈り物」だったのです。私を赤字会社にしか行けないようにし、ファイナセラムミックの研究開発という仕事に打ち込むしかできないようにした——そのことが

挫折続きの人生に終止符を打ち、新しい人生の扉を開いてくれたのです。

私は不十分な設備しかない研究室で、当時未だ注目されていなかったファイナセラムミック材料の研究に、寝食を忘れ一心不乱に打ち込みました。その結果、新しい材料の開発に成功するなど、素晴らしい成果をあげることができました。しかし、新たな技術開発をめぐり、上司と対立し退社せざるをえなくなっていました。

そして、そのような私を支援してください

る方々が、京セラをつくってくださいました。といつても、できたばかりの会社はい

つぶれるか分かりません。社員を路頭に迷わせないためには、以前にも増して、必死に働くしかありませんでした。

そんな私を見て、周囲の人々はこう評しました。

「あいつは運のない男だ。二十七歳という身空で、先行きのしれない会社の先頭に立ち身を粉にして働いている。あの苦勞は報われるのだろうか」

ところが懸命に働いた努力は報われ、京セラは発展を続け、いまや一兆円を超える売り上げをあげるまでに成長を果たしました。また同時に、私自身の人生も、多くの方々のご支援を得て、想像もできないほど素晴らしいものとなりました。

それは、私だけではありません。京セラの創業期とともに必死になって働き、苦勞とともにした人皆さんがそうでした。明日をもしれない、零細企業であった京セラに入社し、朝から晩まで一所懸命にともに働いた。両親から、「そこまで働く」とは無い。体を壊すから辞めなさい」と諭されたこと

もあるでしょう。それでも努力を惜しみませんでした。

辞めていった人もいましたが、残った人たちは、苦勞を苦勞と思わず、不平不満を漏らすことなく、明るい希望を抱きながら、夢中になって働き通しました。そんな仕事への打ち込みが素晴らしい人格を育ててくれたのです。当時、一緒に苦勞した、どこにでもいそうな平凡な若者たちは、傑出したリーダーに成長し、その後の会社の発展を支え、いまは多くの人が幸せな日々を過ごしています。

◎与えられた仕事を天職と考える

一所懸命に働くことが、人生を素晴らしいものに導いてくれたのです。働くことは、まさに人生の試練や逆境さえも克服することができ、「万病に効く薬」のようなものです。誰にも負けない努力を重ね、夢中になって働くことで、運命も大きく開けていくのです。

人は得てして、恵まれた環境にあっても、与えられた仕事をつまらないと思ひ、不平

不満を口にします。しかし、それで運命が好転するわけではありません。与えられた仕事を天職と思ひ、その仕事を好きになるよう努力し、さらに打ち込むのです。

そうするうちに不平不満は消え、仕事も順調に進むようになっていくはず。そして、さらに懸命に働き続けていくことで、素晴らしい考え方や人格を自分のものにする事ができ、結果として物心ともに豊かな人生を送ることができるようになります。

現代の若者を見ると、単にお金を得るためにだけ働けばいいという風潮がはびこり、耐えるということや、努力すること、ことには意味がないと考える人々が増えていくように思われます。それが、ニートやフリーターの増加につながっているのです。

どんな困難に直面しようとも、誰にも負けない努力を重ね、いつも明るく前向きな気持ちで懸命に働き続けることで、人生は必ずや豊かで実り多いものになる——このことを、人生の先達である我々が、いまを生きる若者たちに伝えることが責務であると思ひます。

* 巻頭の言葉 *

イエローハット相談役

鍵山 秀三郎

大阪の貝塚市立第四中学校三年生の津田ひとみさんが発表した、少年の主張「輝き」をご紹介します。

「輝き」

第四中学校三年 津田ひとみ

ある中学生の作文から

今まで味わったことのない達成感。私の心が輝いた瞬間でした。

学校のトイレと聞くと、誰もがあの臭い汚れた便器が頭をよぎると思います。

私もそうでした。便器を素手で磨くなんて、絶対に考えられない……。その光景を見た時に受けた衝撃は、言葉に言い表せないものでした。

昨年九月、私達の学校に「泉州掃除に学ぶ会」の方々に来て下さいました。私達四中の生徒と一緒にトイレを掃除する。その活動に私も参加しました。それまでも、学童保育、老人ホーム、障害者の施

設など様々な場所でボランティア活動に意欲的に参加してきました。そのたびに「ありがとう」と感謝される、温かい笑顔に包まれる事がうれしくて……。

以前の私は、完璧主義者でした。何でもできる良い子と思われたくて必死でした。私がそんな風に思うようになったキッカケ——それは小学生の時、両親が別々に住む事になりました。私にとって父のいない寂しさより、毎日働き続けている母の姿を見る苦しみの方が何倍も大きいものでした。何もできない幼い自分のもどかしさ……。忙しい生活の中で、常に

笑顔絶やさなかった母が初めて流した涙。今でも目に焼きついています。その時決心したのです。「良い子になろう」と。「お母さんに喜んでもらいたい」。小さな心に芽生えた大きな想いでした。

やりたくない事でも、周りの人が見ているからやる。人の目ばかり気にする日々。いつの間にか建前だけの私と本心の私、二人の私を使い分けるようになり、「良い子」を演じるようになっていきました。その方が楽だし、周りも認めてくれる。純粹に母を思いやる気持ちの間違った方向に進んでしまっている事にまだ私は気

づいていなかったのです。

そんな私が、荒れていると噂の四中に入学しました。この学校では、生徒会を中心に学校を良くする為という目標を持ち、様々な取り組みを行っていました。

良い子でいたい私はそんな活動にも積極的に参加しました。でも、心の中では「何で私が掃除なんか……」「しんどい」「面倒くさい」と、もう一人の私が囁いていました。上辺だけの心が入っていない活動を続けていました。

そんな時出会ったのが、学ぶ会の方々。何のためらいもなく、汚れた便器を素手で磨き始めたのです。一瞬鳥肌がたちました。

「何でそこまでして……」

その時、私の中で何か音がたてて崩れていくのを感じました。何の見返りも期待せず、無償の想いでひたすら便器を磨く人々。自分の価値観のちっぽけさを思い知らされました。私が今まで大切にしてきたことって何だったんだろう。他人に良く見られたい。その為に本当の自分を抑えてきた。ウソで塗り固められた

空っぽな人間。私は良い子なんかじゃない。

掃除だって好きじゃない。私は弱い人間なんだ——今まで心の奥に閉じ込めていた感情が一気に溢れ出してきました。「変わりたい……心の底から頑張れる私に」。そう強く思いました。そして、おそるおそる、自らの手を便器に突っ込んでみる……。すると不思議な事に抵抗感が薄れていき、逆にきれいにしたい一心で夢中になって磨き続けている自分に気づいたのです。みるみる内に清潔感の漂う真っ白なトイレに大变身。充実感が胸がいっぱいになりました。自身の汚れた部分もこの便器の汚れとともに、洗い流されたような気がしました。自分の殻を破り、

一步大きく成長することができました。今ではすっかり当たり前になったクリーン作戦。やるたびに皆の達成感に満ち溢れた笑顔が輝いています。この輝きが波紋のように広がっていき学校や社会をも変えていく大きな力になっていきます。

自分の心を磨くクリーン作戦。二十年後の後輩達の為にも、伝統として繋いでいく事が私の使命なのです。

*

見事な文章です。発表する態度も自然であり、且つ堂々としていて敬服しました。大阪大会最優秀賞受賞にふさわしい内容です。「致知」を愛読しておられる皆様に、新春の明るい話題として紹介させていただきます。

第四中からは他にも高塚いずみさんなど、津田さんに匹敵する少年少女が現れています。

このように輝く少年少女が第四中からなぜ誕生するのかは、先生方にお会いしてよく分かりました。至誠を備えた指導者の下には優れた生徒が生まれることに納得しました。津田さんを指導された川崎雅也先生は、朝早くに登校して、百三十人もの生徒さんの日誌に朱を入れておられるとのことで、頭が下がりました。

日本を美しくする会の活動を通して、全国には素晴らしい先生方が大勢いらっしゃることを知り、嬉しく思っております。

津田ひとみさんの作文を、ぜひ「致知」の読者の皆様にご紹介したいと思います。掲載させていただきます。